

FT8ユーティリティの使い方

1. 出来る事

現在の Version では次の事が出来ます。

- (ア) QSO した Entity を BAND 毎に一覧表表示する。
- (イ) Prefix を入力 Entity を検索する。同時に BAND 毎のその Entity の QSO 数を表示する。
更に、QSO 数をクリックするとその月日、時間などのデータを一覧表示する。
- (ウ) LOG ファイルを Backup する。また直接画面表示する。
- (エ) 1 台の PC を用い、複数の無線機で運用する場合に WSJTX. INI ファイルをその無線機にあったものに自動変更・設定する
- (オ) 方位地図を表示する。

2. 制約

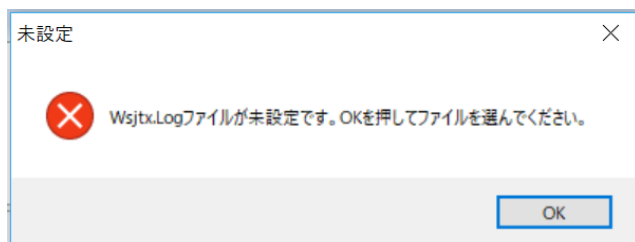
Excel が Install されていないといけません (今後、Excel 無しも検討したい)

3. 運用の実際

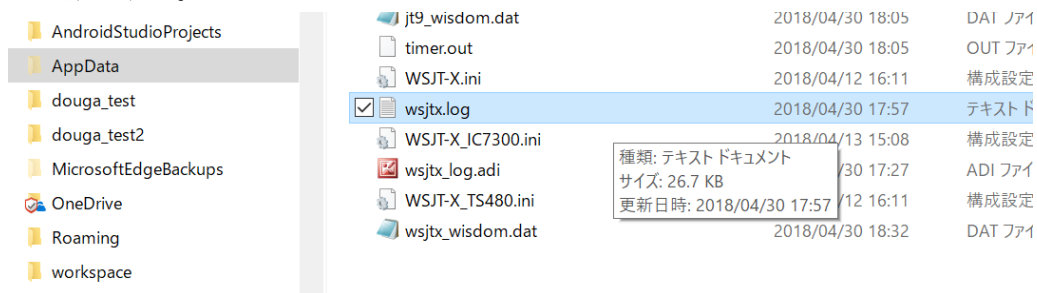
先ずショートカットをクリックしプログラムを起動する。



一番最初の起動時だけ、次の WINDOW が表示されるので”OK”ボタンを押す。



エクスプローラが表示されるので、WSJTX を INSTALL したフォルダにある WSJTX.LOG を指定する。



これで下のようなメイン画面が表示されるので、必要なユーティティ操作を行う。



(ア) Log のバックアップファイルを生成する。

“ファイル”をクリックし、表示されるプルダウンメニューで”LOG バックアップ”をクリックする。

これで、201805201721_WSJTX_BCK.LOG のような WSJT-X.LOG をバックアップしたファイルが出来上がる。ファイル名の数字は年月日・時・分を表す。

出来上がるフォルダは、WSJT-X.LOG と同じフォルダである。



(イ) Log ファイルを直接開き表示する。

“ファイル”をクリックし、表示されるプルダウンメニューで”OPEN LOG FILE”をクリックする（上図参照）。

これで、WSJT-X をインストールしたフォルダにある LOG ファイルがメモ帳で表示される。WSJT-X 画面からも直接開くことが出来るが、エクスプローラで WSJT-X.LOG をクリックしないといけないため、そのフォルダ内に複数のファイルが存在すると煩わしさを感じる為、ここからも表示出来るようにした。

QSO 済の Entity 欄（実際は Prefix 欄）は緑色で塗り潰される。また最下部には総数が表示される。

尚、保存が必要な場合は別名で保存し、DXCC_ENTITIES_MODIFY.XLSX は原本として、そのまま残すようにする。

誤って、そのまま上書き保存してしまった場合は BAND 毎に書き込まれた QSO 数を削除し空欄にして上書き保存しておく。

#	Prefix	Entity	continent	ITU zone	QO zone	GL	7	10	14	18	21	24	28	
331	ZD9	Tristan da Cunha & Gough I	AF	65	38	IF32, IE59								
332	ZF	Cayman Is.	NA	11	8	FK99								
333	ZK3	Tokelau Is.	OC	62	31	AD0								
334	ZL, ZM	New Zealand	OC	60	32	BE78			2		6			
335	ZL7	Chatham Is.	OC	60	32	BF16								
336	ZL8	Kermadec Is.	OC	60	32	AG10								
337	ZL9	Auckland & Campbell Is.	OC	60	32	RD39, RD47								
338	ZP	Paraguay	SA	14	11	QG14				1				
339	ZR, ZS, ZT, ZU	South Africa	AF	57	38	KG44								
340	ZS8	Prince Edward & Marion Is.	AF	57	38	KE83								
#	END	Entity	continent	ITU zone	QO zone	GL								
総QSO回数							0	0	116	4	210	0	0	330
総Entity数							0	0	26	3	39	0	0	

(ウ) 方位地図を表示する。

DX QSO 中にその Entity の方位を知りたい時に方位地図を表示するとビームを向ける方向が分かり便利である。

“方位地図” をクリックすると右図のような地図が表示される。

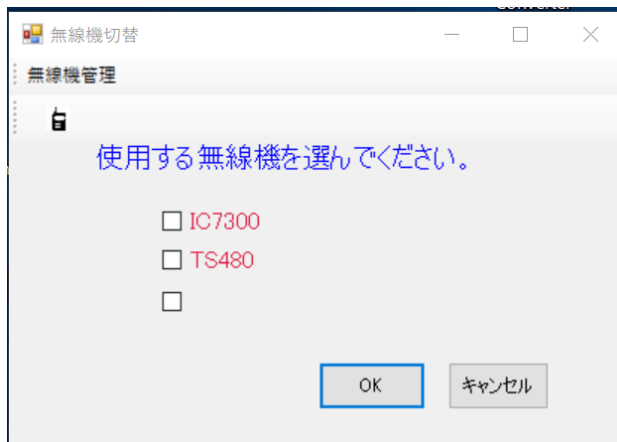


(エ) 1 台の PC を使い、複数の無線機で運用する場合に WSJTX. INI ファイルをその無線機にあったものに自動変更・設定する。

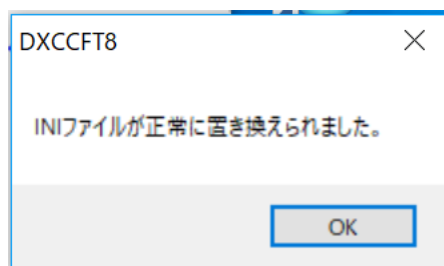
“無線機切替” をクリックする。



下の WINDOW が表示されるので、使いたい無線機にチェックを入れて”OK”ボタンを押す。

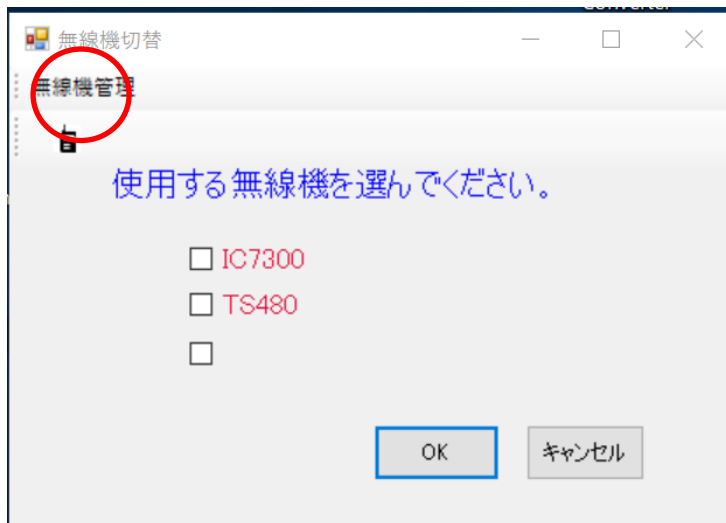


その無線機名の付いた、WSJTX_TS480.INI などがプログラムと同じフォルダにあれば問題なく INI ファイルが置き換えられ次の WINDOW が表示される。ファイルが無かったり、名前が違っているとエラーWINDOW が開く。



無線機の名前の登録は次のように行う。

“無線機切替 “WINDOW にある” 無線機管理” をクリックする。



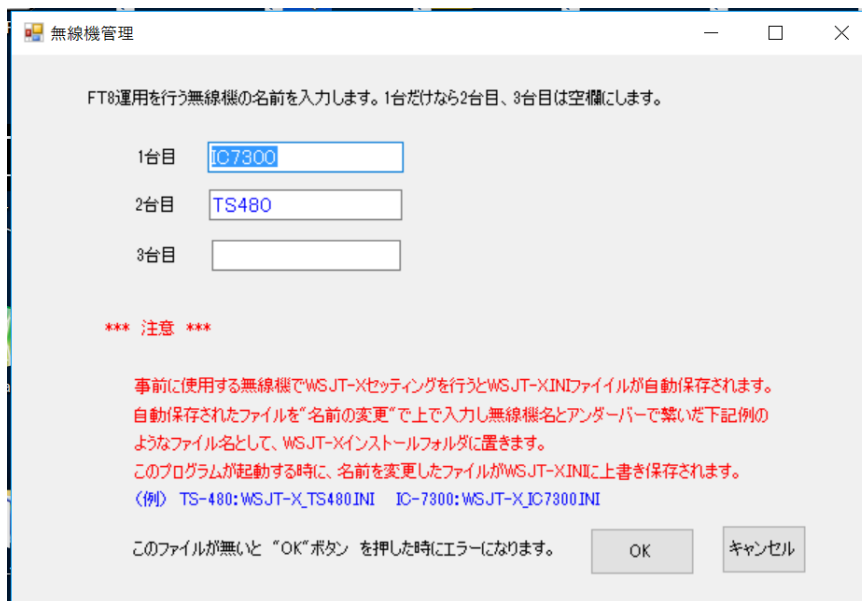
下の WINDOW が開くので使用する無線機名を入力する。

削除する時は空欄にすればよい。

重要なことは、ここで入力した無線機名が夫々の無線機用 INI ファイルの目印としてファイル名に使われることである。

(例) WSJTX_TS480.INI

無線機切替用の.INI ファイル名は下図で入力する無線機名と同じ文字列を使用したものにしておく。



(オ) Prefixを入力 Entityを検索する。同時に BAND 毎のその Entity の QSO 数を表示する。
更に、QSO 数をクリックするとその月日、時間などのデータを一覧表示する。

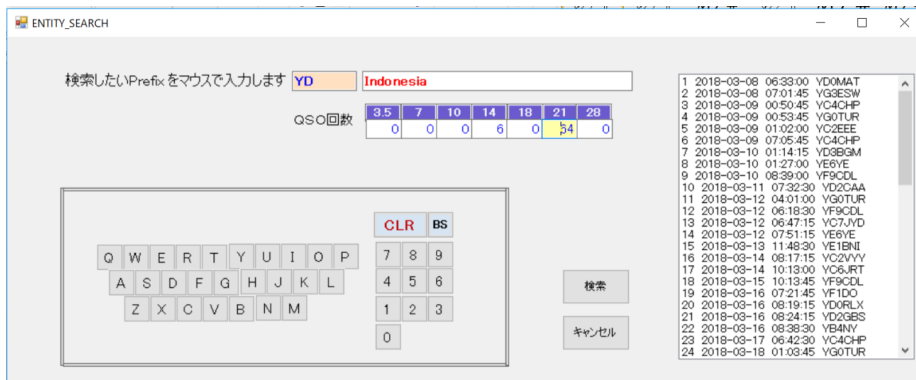
“ENTITY 検索”をクリックする。



下の WINDOW が表示されるので、マウスで画面のキーボードをクリックしながら、検索したい Prefix を入力し、“検索” ボタンを押す。



該当する Entity があれば Entity 名が表示される。同時に BAND 毎の QSO 数が表示されるので、例えば 21MHz の 64 という数字をクリックすれば、その詳細データが右の欄に表示される。なお、“CLR”キーで入力した Prefix をクリアーした場合、また”BS”キーで1文字消した場合表示されていた Entity 名と QSO データはクリアーされる。



4. 各フォルダの配置

このプログラムが正しく動作するためには、決められたファイル名が正しいフォルダに配置されてないといけません。

(ちなみに当初は、任意ファイル名で任意フォルダに配置出来るようにしたが、WINDOWSの基本操作を理解していないとかえって混乱する可能性があるため、固定フォルダの固定ファイル名とした)

このプログラムが関連するファイルは次の通り。

WSJTX を Install したフォルダ

WSJT-X_TS480.ini
WSJT-X_IC7300.ini
(WSJT-X.ini)
(wsjtx.log)

青色：貴方が用意するファイル

黒色：もともとあるファイル

このプログラムを置いた (任意) フォルダ

DSCCFT8.EXE (このプログラム)
DXCC_EINTITIES_MOFIFY.xlsx
無線機.txt
FILE_DIRECTORY.txt

赤色：私が提供するファイル

緑色：最初の起動時に自動的に出来上がる

5. DXCC ENTITY LIST の編集

Entity に追加、削除が生じた場合：DXCC_EINTITIES_MOFIFY.xlsx の行の追加、削除を行い編集します。

Prefix に追加が生じた場合：半角の“,”で区切り左詰めで追記します。この時、余計なスペースが入らないようにします。1 Entity に属する Prefix は必ず Excel の1行の中に全てを記載します。1行の中で折り返し複数段になるのは問題ありません。2行に跨った入力をするデータがおかしくなり思った結果になりません。

Prefix に削除が生じた場合：単にその Prefix を Delete します。